

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル幡ヶ谷九〇四 電話(03)337714649

振替 東京0158431 労金 東京労金本店No1154163

FAX(03)329915367

購読料 月額600円 6カ月前納制

### 〈もくじ〉

#### ■巻頭言■

「社会通信」六百号と新刊『政界再編後を読む』  
労働再編成、国鉄「分割・民営化」、そして社会党  
社会党の新政強行すれば分裂必至…………… 2

#### 特集・「社会通信」六百号に寄す

護憲の党を再建する実践を…………… 3

誌上での活発な論議を…………… 6

事務局の皆さんご苦労さま…………… 6

「丸ごと新党」の本質暴露を…………… 7

兵庫とともに「人間復興」の確立めざせ…………… 7

府中刑務所で句会十年…………… 8

「社会通信」のエネルギ―…………… 9

復旧活動の問題点が浮き彫りに…………… 10

市民が主人公の街づくり運動を開始(兵庫)…………… 11

候補がたりない!…………… 12

― 県議選七三%、東京五六%の擁立数 ―…………… 12

「九五宣言」の凍結を求む…………… 14

― 村山委員長への意見書 ―…………… 14

読者からのおたより…………… 15

編集部だより…………… 13

◆新刊案内 上野建一著 社会通信刊 ◆…………… 16

政界再編後を読む 護憲の旗を掲げて…………… 16

A6判上製、二百頁、千五百円(千三百円)

# 旬刊 社会通信

## NO.600

一九九五年四月一日

一九九五年四月一日発行  
(毎月一日・十一日・二十日三回発行)

## ■ 巻頭言 ■

## 『社会通信』六百号と新刊『政界再編成後を読む』

「労働再編成、国鉄「分割・民営化」、そして社会党」

「旬刊社会通信」は今号で、創刊六百号を迎えることができました。読者の皆様のご支援のおかげです。創刊は一九七七年十一月、今日の社会党の遠因をなした国会議員への社会党大会代議員権付与が、ジャーナリズムをにぎわせていた時でした。当時、私はまだ三十とちよっと、今はなき向坂逸郎先生の励ましでの出発でした。

今になると、向坂先生の「励まし」の意味がわかります。「通信」発刊後、すぐに直面したのが労働再編成でした。このたたかひの中で「六百号に寄す」に寄稿いただいた（これからもつづきます）先輩や友人、若い同志と精神的な結び付きを得ることができましたし、その渦中での国鉄「分割・民営化」のたたかひでは、国労東京の仲間たち、とりわけ東建工分会（当時。現国労東工分会、中央支部）、新宿保線区分会（国鉄当局は彼らがよほど憎かったのでしょう、新宿保線区の名を抹消してしまいました）の仲間から、労働運動のエキスを学ばせていただきました。これが私のバックボーンです。

「分割・民営化」時の日々は忘れることができません。兵庫の一人人集会（たしか県立体育館だったと思います。地震でどうなったのでしょうか）、東京会議・国民会議で全国を飛び歩いた日々、東建工の仲間の支えでおこなった二度のシンポジウム等々。当時のスローガンは「分割・民営化は阻止できる」だった。このスローガンには賛否両論あったようです。ようですというのは、私に直接言ってくれた人はありませんでしたが、このスローガンは空文句、間違いだとの陰の声が大きくあつたようだからです。

労働運動の原点は現場の怒り、運動です。怒りは途方もない創意・工夫を生み出します。生の人間の声に何をおいても耳を傾けなければなりません。国労が残ったのもそのゆえです。修善寺大会も忘れることはできません。国労の若い仲間たちは、この大会に「もし労資平和協定ということになれば、国労はむしろ国鉄で働くこともやめる」との決意で参加されていました。だから、修善寺大会に勝利できたのです。当時の「想い」が必要です。

人活センター、清算事業団そして解雇、闘争団のたたかひは我が妻を労働運動の主戦場へといざないました。それが「紙ひとえの選択―国労鹿児島一万分の一の記録」の出版で、今日の社会通信社を支える力です。岩井章氏の全国行脚（全国の闘争団を訪ね、ヒザつき合わせ激励）は、「指導者とはいかにあるべきか」を教えてくれるものでした。

労働再編、国鉄「分割・民営化」から当然予想されたのが、こんにちの政治、とりわけ社会党をめぐる情勢です。若い仲間には「そんなことあったの」ということでしょうか、社会党の左翼バネは総評、とりわけ国労でした。総評が消滅し、国労が少数組合となり世論から消された時、労働運動は右翼バネとなり、社会党の「保守第三政党化」（実質は消滅の運命）の道は確定づけられていたのです。

今問われているのは、新たな社会党の再建です。「護憲ネット」がその使命を果たそうとしています。その中心的役割を果たしているのが、上野建一氏。上野氏は「政界再編成後を読む―護憲の旗を掲げて」で、当面する私たちの課題について全力を振りしほり問題提起されています。

「社会通信」は来年成人式を迎えます。上野氏の著書で「さらに一般の飛躍をとげる」、この想いで全力をつくします。ご愛読、そして「通信」をひろげてくださることを心から訴えます。人間らしく、働く者の明日の日本を切り拓くために。

（滝野 忠）

## 社会党の新党強行すれば分裂必至！

——護憲の党を再建する実践を——

「丸ごと新党」に光明なし

社会党を守り、新党（第三保守党への民主主義リベラル新党）に反対するという良識ある党活動家のなかにも、分裂を恐れること神を恐れるごとき政治姿勢の人達がかなりいる。そのためズルズルと新党の方向に引きづられて行くのである。社会党中執の山花新党問題に対する態度は政党指導部のものとは少しもいえない。方針もなければ指導もない。無責任が背広を着ているという姿である。ただただ分裂を恐れ、山花・田辺・久保などの策動に妥協を続けているだけである。そうしている間に社会党の支持者層は次々と離れ、支持率は今や九%内外である。

今社会党は分裂を恐れながら、実は分裂の方向に進んでいるという、まさに悲劇の幕が開いたという状況である。三月十六日の中央執行委員会は「可能な限り早い時期に、さまざまな階層の人たちで構成する『新党準備委員会』を発足させる。『新党準備委員会』は新党の理念と政策目標を策定するとともに、新党結成大会の日程を定め、参議院選挙は新党の旗で戦うことにする。」ことを決めた。この決定は、まさに中執の中に「新党問題検討委員会」を設置したが、その中間報告（わが党の新党づくりに対する基本態度）を全員一致で承認したものである。いわゆる社会党を守る立場で新党反対をいつてきた村山首相支持グループも参院選前の新党結成に賛同したことになった。もちろん、この新党結成は社会党の議決機関の決定でもなく、下部組織の県本・総支部などの決定でもないののであって、今のところ党と党員を規制する何ものもないが、党内民主主義のない社会党は、中執の決定がこれを支持する右派グループや中間派によって既成事実として、あたかも党全体の決定であるかのように飛び廻るのである。

今度の場合、山花新党を支持した全通、全電通、電機、電力などの七単産、これに反対した自治労、日教組、私鉄などの九単産は、山花新党の崩壊を機に協調、ことに全通、全電通と自治労、日教組が両者を代表して談合し、リベラル新党を参院選前に発足させることで妥協、一致させた。いわゆる「丸ごと新党」である。そのうえで「社会党と連帯する労働会議」が今度はこちらを代行（七単産派と九単産派を）して、新党検討委員会（井上一成委員長・新民連）に新党結成促進方を申し入れた。この申し入れは、労働組合の枠を越えた「介入」の部分が多く、細かく具体的に指導している。例えば党首の選び方から組織、財政、党名、役員などについて国民から共感をえられる説得力あるものにせよというのである。新党の理念や必要性に欠けるためイメージでカバーしようというのであろう。そんなことはできるはずがなく、新進党のように大がかりでやってもさっぱりブームは出ていない。リベラル新党の場合は、存在理由すら見当らないのである。

いろいろと化粧したり、イメージ作りをやり、労働幹部を動員したり、さらに村山政府の維持などで「丸ごと新党」に説得力をもたせようとしても、一番重要な大義・理念に欠けるということはどうにもならない。丸ごと新党（リベラル新党）の弱点は、今でも次の点を指摘できる。

① 社会党と組むリベラル派が存在しないこと。社会党はさきがけを対象にしているが、さきがけはもともと、自民党くずれの、新党ブームによってつくられた党であって、次の小選挙区制による総選挙では大きく後退する可能性が強く、自民党とどれだけ組めるかが問題で、社会党には魅力も力もないと思っている。

② 参院選前の新党となれば「党名変更」以外の本当の新党となれば、政党助成法による資金（助成金）がとれなくなる。当初は「党名変更」でゴマカスことになれば、いっそう政党不信、新党不信となってハネ返ってくる。

③ 統一地方選の敗北は必至。その責任を誰れがとるのか、村山委員長（首相）、久保書記長への不信が大きくなり、党の下部組織を含めた全体の危機・混乱が拡大し、新党に熱をあげるもの、自民と新進のどちらかの党へ脱出するもの、事実上の党分裂の状況となる。

④ 村山内閣は延命策として「内閣改造」をやろうとするが閣内、自民、社会のなかに造反が出て表面化する可能性がある。国会解散・同日選挙も検討されるが、準備不足（ことに社会党）と技術上（選挙事務上も）、そして憲法上の疑義もあって実際にはできない。

⑤ 丸ごと新党に、社会党の県本部、総支部段階はかなりのところで反発。分裂が全国化する。

⑥ 労働組合内の論争も活発化し（春闘総括を含めて）、幹部と活動家層との対立が激化、組合員の不信拡大によって、新党どころでない。組織防衛に追われよう。

⑦ 参院選の戦う体制がとれず、結局社会党は大敗に追い込まれ、村山内閣総辞職の可能性が生ずる事態となる。

#### 分裂を恐れては党を守れない

「分裂」はいかなるとき悪いものであって、統一のためには「妥協」は良いものという一般論が、具体的たたかひの場に横行している。これについて、日本の社会運動の父ともいえる山川均は、かつての社会党左右の分裂の際、次のように発言し、左派活動家を激励している（一九五一年十月）。

「一般的、抽象的には、分裂は悲しむべきことであり、統一はわれわれの力を強めるものである。けれども具体的には、いつまでもそうなのではない。まちがった基礎の上に築き上げられた建物は、より高く築き上げれば上げられるほど危険で有害で無用な厄介物になる。反動期においてとくに統一が望まれるのは、反動勢力と戦う力を大きくすること以外の目的はない。まちがった基礎の上の立ち、反動勢力の第五列的要素（敵のまわしもの、スパイ―編集部注）をまでも抱えながら大きくなった政党は、いかに統一が維持されても、反動勢力との戦いには役立たない。われわれの力を強めるいがいかなる理由のためにも、われわれの組織を割ってはならない。しかしただいかなる場合にも組織を割ってはならないという観念的な統一論は、ひっきりょう闘争の回避にすぎない。」

この山川均の言葉は、今われわれが丸ごと新党に対決するための基本的態度でなければならぬ。今の政治・社会の情勢は、まさに反動時代であって、保守反動勢力が戦後最強のところを達している。空洞化されてきたといえ戦後民主主義の城である日本国憲法が危いのである。反動勢力が憲法の改悪を決意すれば、自民と新進の両党の共同・合同の可

能性もあり、連合をはじめとする勤労者層の上部組織を抱き込むことも容易な状況である。マス・コミの大勢も自らの経営不振も加って中立性を捨てつつある。マス・コミ界の自由競争は反動勢力に利用され、企画の低俗化、理念なき主張、公共性を利用した財界への迎合、反動勢力への自主規制、政府機関とのユチャク（審議会などへの幹部社員の参加）など、報道人としての倫理も弱者への共感も失っている。

この状況下に丸ごと新党となれば、戦う体制を放棄し、第三の保守党とまずなり、それをステップに保守二大政党のどちらかに吸収されるしか道はない。したがって「民主主義リベラル新党」が生き残れる展望は生れない。もともと護憲勢力としての社会党を消滅させて保守二大政党制にしようとして最初に提唱したのは金丸信元自民党副総裁であり、それを大筋で受け入れたのは、田辺（社会）、山岸（連合）、江田（旧社民連）などの当時の幹部である。金丸の子分は小沢一郎（新進党）とその一派であり、その流れからいうならば、田辺・山花・久保等をリーダーとする人達と新進党はまさに一つの系統である。政治理念は新保守主義である。言葉づかいは慎重であるが、「九五宣言」は新保守主義の色彩が強いのは当然である。

#### きぜんと新党問題に対処を

今社会党にとって一番重要なことは、反動の時代にあつて、反動勢力とたたかう党にすることか、それとも自らが反動勢力の一部になつても生き延びようとするのかの決断をすることである。今度の新党問題検討委員会中間報告には、統一地方選、それと連動する参院選をたたかっている最中であるのに、「選挙戦では新党づくりを訴える。」となっており、「社会党都道府県本部の新党問題に対する対応は、かなりの温度差があるが、党中央に準じて『新党問題検討委員会』あるいは『新党準備会』の設置と『新党加盟運動』の準備態勢を整えることを要請する。」というのである。これではもう丸ごと新党へ出発進行したということであり、各県本部もこれに対応して新党づくりをやれということである。

このような非民主的、不当なやり方、党員と党の現在の運動を無視した中執の方針を認めるわけにはゆかない。いつせいに抗議すべきであり、党中執の決定や党運営には全て従わないという申し合せを行うべきである。そのうえに立つて次の事項をわれわれは実践すべきである。

① 党中央に批判をもつ全党員（機関で招集できるところは機関で）は、直ちに集合し、新党問題に対処すべきである。当然新党に反対し、社会党を守るために、それぞれの県本や総支部に護憲社会党（仮称）を守る会などを設置し、分裂（新党を右派が強行すればそうなる）に備え、意思統一をはかる。

② 現在たたかわれている統一地方選挙に全力をあげ、ことに護憲派の当選を確実にすべきである。右派の新党派が当選してもなんの役にも（今後の護憲社会党にとっては）たない。

③ 丸ごと新党の動きが始まったらわれわれは、全国的に分裂も想定して護憲社会党再建準備委員会をひろげなければならない。活動を倍加しよう。  
（政権研究班）

◇『社会通信』六百号に寄す◇  
誌上での活発な論議を

近江谷左馬之介（元九大教授）

「社会通信」が発刊一九九年を迎え、この四月一日号が通刊第六百号に当たるとのこと、僅か三年で雑誌を一つ潰した私には、まるでエープリル・フールのように思われる。よくぞがんばった。喝さいしたい。

編集部注は、この機会に、本誌への批判を賜りたいとのこと。そこで私は考えた。私は生涯に二人の師をもった。向坂逸郎と宇野弘蔵のお二人である。他にも秀いでた先生や先輩たちがおいでだが、この二人の巨匠はなんとも拔群だった。お二人の人生の生き方や学風は違ったが、両先生には共通する多くのものがあり、とりわけつぎの一点では、全く同じ考えた。それは、問題の正しい理論的解決は一つしかなく、「見解の相違」などという言葉で問題の学問的追求を回避するのは、俗物的態度だということである。

政党ともなると、研究室とは違って、大衆の組織化や影響力の拡大という実践活動が問題となるから、この点はゆるやかになると思う。いわゆる「共同戦線」党的なあり方でのいのである。ドイツのSEDの後身である民主社会党は、「多元主義」の党という言葉を用いているが、それは過去の「スターリン」党的体質の精算をとくに意識したものであって、その中の意味は「共同戦線の党」と同様なものであろう。

しかし、そのばあいでも、党決議において全党の「合意」が達成されなければ、党は動かなくなる。そしてこれがかじつさいにはなかなか難しいことは、わが社会党はむろんのこと、民主社会党にかんしても、彼地の報道が伝えている。民主主義というものは、面倒な手続きを必要とするものである。

「情報旬報」である本誌についても、同じようなことがいえそうである。本誌が出来事を列挙するだけでなく、それにかんする一定の主張をふくむものであるのなら、とうぜん体制の「反対派」という基本的な枠内でも、それぞれの寄稿に「見解の相違」が生ずるであらう。編集部にも一定の見解があるが、それで交通整理すべきではない。読者層の幅を狭くすることにならうからである。しかし、意見の出しっぱなしでは、問題の所在はわかって、解決の方向はあきらまかにならない。

誌上で、もっと活発に論議すべきである。時もそれを求めているのではあるまいか。

◇『社会通信』六百号に寄す◇  
事務局の皆さんへ苦労さま

坂牛哲郎（元都高教委委員長）

「社会通信」生誕以来、十九年、六百号になるといふ。いささか驚き、滝野さん御夫妻の偉業に改めて感謝の念を禁じ得ない。

日本労働運動、社会党の衰退は、七七年協会規制にはじまり、八九年総評解散、連合成立により決定的となり、その必然の帰結としていま社会党は消滅せんとしている。

七七年誕生した「通信」は、この激しい反動の流れに抗して、歴史の節目、節目に偉大な働きをなしてきてきた。

私が「通信」にかかわってきたのは、第二の節目、総評解散、連合成立のとき以来である。病を得て、職場に帰っていた私は、八一年再び都高教委員長に復帰した。この年の五月、右翼再編成の基本文書、「統一基本構想」が発表された。灰原、三木、渡辺の諸兄と、学習会をもち、対策を協議した。これを主催し、場所の設定から、資料の配布まで、こまごまとした御世話をしてくれたのが、滝野さんである。学習会は、月二回から、週一回くらいまで頻繁にもたれ、自治労、日教組、全通、私鉄、化同と単産横割りに拡大していった。この学習会にはげまされ、日教組、横浜大会では、「統一基本構想」の反対をかちとり、この年の総評大会で、横枝、富塚執行部提案を流産させた。そして、金丸、西岡、海部等と、手を結んだ田中委員長派と対決して日教組は、いわゆる四百日抗争に入る。

思えば、このたたかひの帰結が、日教組、総評、そして今、社会党の運命を決定したといつてよい。この間の事情は滝野さんに求められ毎号のように社会通信に書いてきた。「右翼再編成」が、あたかも労働戦線の統一のように、商業新聞はもちろん、各単産機関紙に報道されていたとき、真実を語る「通信」の役割は大きかった。

私は全国各地からオルグ要請を受け、北海道から沖縄までかけまわった。小集会から、五百人をこす大集会まで、私の話にきき入る活動家は、はじめてこの真実を知り、はじめはとまどい、やがて激しい怒りに燃え、行動に立ち上った。

智は力であり、真実は人を動かす原動力である。全国各地に孤立し、真実をかくされてきた活動家を、「通信」はつなぎ、そして励ましてきた。そしていま、労働運動崩壊、必然の帰結として、社会党が消滅し、海外派兵、改憲が現実のものになろうとしている。このとき「通信」は、全国ネットの大動脈として、歴史的役割りを果しつつある。健闘を祈る。

◇『社会通信』六百号に寄す◇  
「丸ごと新党」の本質暴露を

稲村 守（京都）

◇日本最高の労働者運動を創った「通信」◇  
二十三年ぶりの大雪にみまわれた北海道の網走、北見。街中でも三メートル余りの積雪、日中でも零下二十度にめげず闘い続ける国労の仲間たちに、「社会通信」は読みつがれていました。

国労旭川地本主催の九五春闘山場に向けた学習会は、三月六日から三晩続き、音威子府で開かれた名寄支部の学習会では、六〇年三池闘争時の三池労組本所支部もかくや」と思える団結水準。故郷のわが家に帰ってきたようなホッとする雰囲気。すでに日本でも最高のレベルに達した労働組合。そのネットワークの拡がり、高まりに果たした「通信」の役割は、筆舌に尽くし難いものがあります。

◇戦いの最前線に「通信」あり◇

私自身の小さな歩みをふりかえっても、八三年・京都府園部町長選での自民党・野中一二三派（村山政権を担う野中自治相の実弟）による暴力事件、同年の京都労研センター発

足と翌年の林大鳳初代代表幹事の追悼全国集会、八七年三・三一「国鉄最後の日」「京都からのアピール」による八千人のヒューマンチェイン、八八年の総評・地県評解散反対運動と翌年の京都総評解体阻止・全労協結成、九三年・黄犬契約書提出でもまかり通る京都コンピュータ学院労組首切り仮処分却下、昨年の朝鮮総連京都府本不当弾圧事件と本年の阪神淡路大震災とその救援活動など、ピッタリと闘いの最前線を照らし出す「たいまつ」です。

「護憲のネットワークの強化を」

「通信」読みました」「この争議は『通信』に載ってたものですね」「通信」に載ったので、この選挙のキャンペーンなど、何度『通信』に救われ、公認されたかわかりません。現場で苦闘する労働者を励まし続けてきた『通信』は、まさしく労働者のネットワークです。

阪神淡路大震災により、かつての総評センターに匹敵する「丸ごと新党」の巧妙さが本格化。これと断固闘う「護憲のネットワーク」の一層の拡大強化が急務です。

へさらに舌鋒鋭く、千号めざし」

不謹慎ながら『通信』と回りの様々な「機関誌紙」比べると、ソ連崩壊時の『インターファクス通信』と「国営放送・紙」を想起してしまいます。

ひとえに編集長の自己研鑽と社長夫人のバイタリティーによるものですが、「常に闘いの最前線にいること」と「センスの良さ」によること大。六百号おめでとうございませう。千号めざしお元気です。

### ◇「社会通信」六百号に寄す◇

## 「人間復興」の立場確立めざせ

横堀正一（千葉高教組委員長）

「情報」は氾濫している。ただし、マスメディアによる大量キャンペーンの展開が政財官一体の情報操作と結合し、その大海の中に情勢の本質をあばく労働者・市民による情報伝達の苦勞がつづいている。いま、私たちが最も信頼を寄せている情報紙の一つが「社会通信」である。

「旬刊社会通信」が創刊された一九七七年前後は、私たち日教組は、七四春闘での全一日ストを経て刑事弾圧がはじまり、七六年～七七年にかけて主任制反対闘争をはげしくたたかっていた時期である。公労協のスト権ストをめぐる攻防に示されたように、資本が労働運動の弾圧に本格的に乗り出してきた時期であった。もちろん、労働者のたたかいと一体となった護憲の党としての日本社会党を弱体化するための「協会規制」をめぐる論争も、こんちの社会党解党策動にいたる資本の攻撃の意図を反映していた。

創刊以来私たちは、情勢の本質を見抜く「眼力」を養うことと、全国の同志が「どのようなたたかっているか」を知るために「社会通信」をひとつのよりどころとしてきた。「社会通信」がもつこの役割はますます重要となる。

日本社会党の「集団自殺」が決定的になりつつある。「民主主義・リベラル」の名による新党構想は、社会党とともに私たちが掲げてきた護憲・反戦平和、民主主義擁護、働く



者の生命と権利を守るたたかの変質・転換を意味している。自衛隊の本格的海外進出と国連安保理常任理事国入り、消費税率引き上げ、小選挙区制導入をテコとする総翼賛体制の確立を経て明文改憲へとすすもうとする流れに日本社会党が合流するのであれば（それはほぼ必至であるが）、こうした流れに明確に異議を唱える勢力の結集を急がなければならぬ。

大増税・大量失業の時代を迎えて、阪神大震災にもあらわれた日本の階級情勢は明らかであるが、それにしても、社会党が連立政権の首班をになつていながら、路頭に放り出された労働者の住宅、雇用保障、零細企業の起ち上り支援など、抜本的な対策がなざりにされている状況は目を覆うばかりである。「人にやさしい政治」は何よりも高齢者、弱者、ハンディキャップをもっている人たちに政治がどう対応しているかによって試されるものだ。兵庫の仲間たちが主張している「人間復興」の立場の確立こそが求められている。

私たちは、いま勤労国民が直面している諸課題に真向うからたちむかい、たたかう労働運動と党の再建をはかるために、ひきつづき「社会通信」が「働く者のニュース・ソース」であり続けることを期待する。

◇『社会通信』六百号に寄す◇

## 府中刑務所で句会十年

常松裕（前衆議院議員）

面会へスキップしたき暖かさ 一生

刑務所の冬は寒い。もちろん暖房などない。三月、ようやく少し暖かくなる。そんなある日、面会があるという知らせ。妻なのか。「スキップしたき」で受刑者であることが分かる。全国の俳句コンクールにも入選する程の作者。未だ四〇歳ぐらいである。

天井の蚊に雑巾をぶつつける しげる

夏とて、蚊帳がない。蚊取線香もない。憎つくき蚊が、天井にとまっている。雑巾をぶつつけている作者である。そんな自分への反省がある。還暦ぐらいだろうか。府中刑務所の文芸誌「富士見」俳壇に投五句全て掲載される程の名人である。

夏風呂に七十の首浮きにけり 未治

「七十」というのは、年齢ではない。七十人のことである。風呂に入るにも、号令による。号令でいっせいに浸かり、いっせいに洗い、いっせいにあがる。「七十の首」の一つである自分を省みている。作者は受刑者とは思えない程の温顔である。短歌もつくる。

鼠籠掛りし後も餅齧る 昭太

季題は「餅」。今はねずみが減ったのか、ねずみ籠をみかけなくなった。昔は、どこの家にもあった。かかったねずみが、水に浸けられる運命が待っているのも知らず、餌の餅をかじっている。七〇歳ぐらいだろうか。組の大親分とは、とてもみえない。

日焼せし先生の顔生徒の顔 道心

道心は、在日韓国人だ、と自らのなつた。夏休み中の登校日の句だと思った。ところがこの先生とは、私のことらしい。真夏の選挙でまっ黒に日焼けした私。そして、生徒とは、府中刑務所俳句研究会に参加している受刑者とのことであった。六〇歳ぐらいである。

府中刑務所の中で、受刑者の人たちと俳句研究会をはじめ、約十年になる。とにかく熱心である。紹介したようなすばらしい句をつくる。写生に努めているうちに、生命のかけがえのなさを写しとるようになり、それが句に、おのずとあらわれてくるのだろう。

府中の受刑者は、重刑者である。俳句を通して私は、かれらに犯罪を重ねさせたのは資本主義社会であるとおづくと思う。

「社会通信」誌は、その資本主義と真正面から闘い、私たちに勇気を与えてくれる。六百号を心から祝い、一千号を期待する。

◇『社会通信』六百号に寄す◇  
「社会通信」のエネルギー

原野人（護憲ネット）事務局

もう六〇〇号になるといふ。まず滝野さんとそれを支えた事務局の皆さんの苦勞を思う。人並みの能力と人並みの努力でできることではない。健康に心配のあった奥さんをいたわりながら、社長、編集長、ライター、オルガナイザーを一人でこなし、全国をかけめぐりつつ、月三回の社会通信を一度も欠かすことなく出し続けてきた。

滝野さんと社会通信がなかったら、国労の闘いはどうなっていただろう。

滝野さんと社会通信がなかったら、日本の労働者の運動はどうなっていただろう。

滝野さんと社会通信がなかったら、護憲全国ネットはできただろうか。

滝野さんと親交がなかったら、小生はさほど道を外すこともなくここまで来れただろうか。

ときは春。それも敗戦五〇周年の春、本来であれば社会党が今こそ護憲の旗を高く掲げて、自衛隊を大胆に削減し、殺人機械や殺人訓練ではなく、もっぱら人命を救助するための機械を装備し訓練に励む組織（災害救助隊あるいは平和国土建設隊）を作り、いつでもどこでも（海外にも）すぐに駆けつけることができるようにすべきときである。

ところが猛毒を飲まれた社会党は、脳死状態がいよいよ進行し、財界や保守党に操られるままに、護憲の旗を捨て、「九五年宣言」などという「改憲支持宣言」を発して生命を閉じようとしている。われわれは亡骸（なきがら）を惜しむあまりに、連れ添って改憲新党になだれ込むわけにはいかない。

一歩先を歩いてきた兵庫の皆さんは、いま言語に絶する破壊と被害の中から再び立ち上がって、護憲社会党の再建と、自治体選挙・参議院選挙勝利をめざしている。われわれも兵庫の仲間と学び連帯して、護憲派の候補者の当選を勝ち取りながら、全国的に護憲の社会党を再建するべきときである。六〇一号からの社会通信と滝野さんがそのためにますます活躍されるとともに、護憲ネットのニュースやパンフ「護憲の社会党再建宣言」がますます活用されることを切望する。

## 復旧活動の問題点が浮き彫りに

——市民が主人公の街づくり運動を開始（兵庫）——

兵庫護憲社会党の岡崎委員長から、阪神大震災への「お礼とご報告」が届けられました。あの大地震からはや二ヶ月、前号でも紹介しましたが復興はこれからです。

職場・地域の日常活動、そして自らの生活にとたいへんでしょうが、兵庫の間への支援のとりくみをさらに強め合おうではありませんか。（編集部）

寒さも峠を越し、春が間近に迫っていることが予感される今日このごろですが、皆様方におかれましてはご健勝にてお過ごしのことと存じます。

阪神・淡路大震災に際しまして、皆様方からお寄せいただきました御厚情に心からお礼申し上げます。

さて、今後も私達の脳裏からは決して消し去ることができない恐怖の記憶として残り続けるであろうあの「震度七」を記録した日から、もう二ヶ月が経とうとしています。恐怖と呆然自失の境地に置かれていた私達も、徐々にではありますが自分を取り戻し、生活リズムの回復や運動の再建をはかれるようになりはじめております。しかし、私達のなかにも家が倒壊し、今だに避難所で生活を送っているものも多数残っておりますし、家があってもガスの復旧が遅れたり、家屋の修復のメドがたらずに不便な生活を余儀なくされているものもおります。当然、多くの県民・市民にあっても同様の事態が続いております。

そしていま復旧活動の問題点が浮き彫りにされています。線路や駅舎の復旧作業は、マスコミでもご承知のように急ピッチで進められておりますが、肝心の人間の生活の「復旧作業」のほうは遅々として進んでおりません。このようななかで高齢者や病弱者の死亡が急増しておりますし、老若問わずストレスが高まっています。震災に強い街づくりの掛け声のもとに、住民との合意を回避した行政主導の再開が強行される動きが強まっています。また、神戸の犠牲が多かったのは開発優先の市政が生んだ人災に他ならないという指摘が行なわれているにもかかわらず、神戸市が選んだ各種の「復興委員会」の構成は「開発優先市政の立案者」たちと同じ顔触れであるという厚顔無恥さを見せています。いまだに十万人を越える被災者が今日住む家に困っているにもかかわらず、神戸市は早々と神戸沖空港の早期着工、五年後に「復興博覧会」の開催をぶち上げています。このような神戸市の行政姿勢に見て取れるものは、これまでも増した人間不在のうわべだけの華かさを誇る神戸市株式会社再建に他なりませんし、震災の犠牲が拡大したことにたいする反省のひとかけらさえもない、まさしく市民への挑戦でしかありません。

住民各層の市政にたいする批判も日毎に強まっており、私達は民主的な有識者や市民運動の仲間とも手を携えて、「新しい神戸をつくりだす市民会議」（前号参照、編集部）を結成し、市民が主人公となった街づくりのための運動を開始しました。また、県会と被災市の議員の統一自治体選挙の投票日は六月一日に延期されることになりましたが、当然開かれる選挙戦においてはこれらの課題をめぐって烈しい攻防が展開されることになりました。

私達は、皆様方からいただいた御厚情に応えるためにも、市民が主人公となった神戸市の再建運動を成功させるとともに、統一自治体選挙戦において護憲社会党に結集する全候

補の当選を期して奮闘する決意です。簡単粗辞ながら、お礼とご報告といたします。末尾ながら、仲間の皆様方の今後のいっそうのご健勝を祈念いたします。

※編集部より 全国の仲間も支援を！ 口座は左記のとおりです。  
護憲社会党阪神大震災対策本部 本部長 岡崎 宏美

### 《銀行口座》

- 銀行名 さくら銀行 ● 支店名 神戸営業部
- 口座名 護憲社会党「阪神大震災」対策本部救援カンパ 本部長岡崎宏美
- 口座番号 7557183

## 候補がたりない

—— 県議選七三%、東京五六%の擁立数 ——

統一地方選が告示された。しかし、この静けさはどうしたことだろうか。マス・メディアは知事選主体にアレヤコレヤの特番を組んでいる。しかし、選挙民の関心は今一歩。改悪公選法の運動制限——定例選挙の場合、六ヶ月前からポスター禁止等——にあることが最大の要因であることは前号で述べた。

これにさらに輪をかけて「無関心」醸成を増幅させているのが、争点をつくれぬ、あるいはつくりたくない社会党の路線転換だろう。八十年代以降、各級首長選は「相乗り」が拡大傾向にあったのだが、今年の知事選は、まさに極まれりといった状況である。

前回までは北海道、神奈川、福岡等で「社会党擁立候補対自民諸潮流」との構図がまだあった。今回、その構図は岩手を除きすべて消えた。十二都道府県知事選の図式は——

- 一、自・進・社・さ・公対共（福岡、神奈川、東京、大坂）
  - 二、自・進・社・公対共産（大分）
  - 三、自・進・公（佐賀）
  - 四、自・社・公（福井）
  - 五、自・社対共対ム（秋田）
- 以上の五つのケースはいずれも大政翼賛会型であり、連合推せんのが特徴だ。
- 六、自・さ・自由対進・社・公対共（北海道）
  - 七、自・公対さ・社（島根）
  - 八、自・社対進・公・さ（三重）

以上の三つのケースは「対立選挙」になっているが、社会は自・進にすいとられており、政策のちがいはゼロに近く、実質大政翼賛会といえよう。しかも、有力候補は元官僚なのだから、なおさらである。

社会党が独自の候補をたてたかうのは岩手だけで（ここは小沢一郎の地元）、自対進・公対社対共との構図である。

こういうことを調べていたら「社党が衆院選小選挙区候補——首相含め九十四人固まる」との記事がめについた。内訳は現職六十五人、前・元二十一人、新人八とのことで、選挙

区が固ったのが八十人で最終的には百五十人をめざすとのことだ。「新党問題検討委つくる、結論は三月二三日の統一地方選告示日がメド」という中執(三月二日)、「民主・リベラル新党結成は四月下旬」という山花グループ。解党するといいながら候補を決められるのだろうか。支持者からは「いいかげんにしてよ」との声が聞こえてくる。自、進、さは着々と候補を決定。社の決定はまだない。

それにしても不思議なのは一対一で争う首長選で独自候補をほとんど擁立せず、改悪公選法でたたかわなければならぬ小選挙区でどうして擁立し、当選させることができるのかとの疑問だ。ここも一対一だよ。

統一地方選立候補者がほぼ固まった。道府県議では自民一四八五名(前回比一七一減)、社会五一四名(公認四一九、推せん九五で、前回比一八六減)、共産三二五(前回二九四、改選議員九八名)とのことだ(最終段階では異動あり)。

自民候補が減るのはよく分る。分裂し、進、さ等々候補が擁立されるからだし、「分裂」を嫌って無所属で旧自民をまとめようとの考えも少なくないと考えられるからだ。

それにしても社会党は! まだふえるのかもしれないが前回七百が目下五百十四、約七三%強の候補しか名乗りを上げていない。全員通ったとしても約三〇%の減。これではマスコミの関心は「減少をどこまでくいとめられるか」に注がれざるをえない。

立候補数の減少ぶりは東京でとりわけいちじるしい。前回、二百三十五名が立ったが、二月一七日現在、予定候補者は百三十三名。なんと前回の五六・六%。

友人、知人に「ぼくは無所属」「ぼくは護憲リベラルの推せん」という人も少なくない。彼らの気持ちは「護憲の社会党でありつづけたい」というのであろう。彼らを合わせても百五十名に達するかどうか。

足元を崩して何が新党だ、これでどうして「第三極」がつくれるのだろうか。

## ◇ 編集部だより ◇

▽六百号を迎えることができた。夢のような嬉しい出来事。読者ならびに編集子を支えていただいた皆さんに心から感謝。わが師、向坂、岩井、灰原、そして故山本先生に。

▽「通信」は来年「成人式」。そのステップとして上野建一著『政界再編成後を読む―護憲の旗を掲げて』を発刊できた。読んで、そしてひろめて。社会党精神の発展のために。

▽歴史は吠えている。今こそ若者の出番。諸先輩の経験をともしながら、先輩諸氏を乗り越え、新たな運動をつくるのが私たちの任務。総評はすでになく、社会党も残念だけれど、「解党」一寸前なのだから。

▽いつものお願い。「通信」拡大に力をお貸し下さい。そして六百号と今後へのご意見寄せて。見本誌送ります。

▽「六百号に寄せて」では先輩、友人から過分の言葉をいただいた。さらにがんばることをお誓いし、お礼の言葉に。

## 「九五年宣言」の凍結を求む

——村山委員長への意見書——

一、はじめに 私はNTTの銚子無線電報局で働いています。会社は来年（一九九六年）三月廃局を提案し、組合と整理をはかりました。これには船舶の安全性、ユーザーへのサービス、労働者への犠牲等いろいろな問題点を含んでおり、今でも反対の意思に変わりはありません。二八年働き続けた職場がなくなろうとしているのです。私は反対の立場で運動をしてきました。しかし、昨年九月の党大会で「基本政策」の変更の決議を境にして五名の党員が離党しました。さらに一名の党員も離党しようとしています。そのために意思統一は取れなくなり、戦術上の違いは深まるばかりで運動に支障を来しております。その他の職場闘争、地域闘争さらには今回の統一地方選においてもしかりです。

私は「基本政策」の変更には反対の意見書を上げました。二十年以上の党活動を行ない、職場の党建設のために奮闘してきましたが、今ほど党に失望しているときはありません。現在、諸々の思い、しがらみの中で党に残って「新報」配布、職場闘争、地域での活動等行なっています。今回の「九五年宣言」（草案）は到底納得できるものではありません。「これが採択されたら党をやめる」という人もあり、党の存在さえ危うくならざるを得ません。社会新報の減少は目を覆うばかりのものがあります。党を支える地方、現場の党員、支持者がいなくて党は存立できるものではありません。私は訴えます。再度「基本政策」を堅持することを。さらに分裂・解党につながるような大会の開催に反対し、「九五年宣言」（草案）は以下の点で問題があり凍結をお願いするものであります。

二、「九五年宣言」（草案）について 1）「新宣言」の総括なくして「九五年宣言」を基本文書とするには問題があり過ぎ、党大会を開いて新党結成の方向性だけを確認することも時間尚早と言えます。

2）消費税反対の看板を降ろし、推進すること自体、弱者切り捨ての何ものでもないと思います。そして働く者の党から市民一般の市民政党にすることは経営者（特に大企業）と一線を画し、働く人々や弱者を守ってきた社会党本来の姿とは似ても似つかぬものにならないのではないのでしょうか。

3）「九五年宣言」（草案）には「日本国憲法の具現化に努め」とありますが、「新宣言」には「非同盟・中立・非武装」の実現を高く掲げています。「九五年宣言」（草案）は「日本国憲法の具現化」を掲げながら、なぜ「非同盟・中立・非武装」の基本政策を放棄したのか、その歴史的総括とともに全党が納得し得る理由を明確にする必要があるのではないのでしょうか。また、「九五年宣言」（草案）には「平和は戦争の要因となる恐怖・窮乏・憎悪を地球上から永遠に除去し」とありますが、何か宗教団体の布教の一説のようで具体的でないような気がします。非武装・非軍事同盟など日本国憲法の優れた理念を世界に展開することなくして、「戦争の要因」を「永遠に除去」することはできないと思います。

4）「九五年宣言」（草案）は「自衛隊は合憲」「日米安保条約は堅持」の立場にたっていますが、日本国憲法の立場にたてば、当然、自衛隊・安保は違憲であり、その立場から自衛隊の「段階的な縮小・改編に取り組み」べきであり、軍事同盟としての安保条約も解消して、平和友好条約に切り替えるべきであります。また、PKO・PKF等を認めることも憲法違反であると思います。

（千葉・尾辻）

## ◇読者からのおたより◇

震災疲れ、ごめん ○部減部ねがいます。震災疲れとカゼで大変です。(兵庫・K)

編集部より そんな中、本当にありがとうございます。がんばります。

状況つかめず苦勞 誌代遅くなりました。状況がよくつかめませんが自分ががんばりつづけます。今後の奮闘を期待しています。(札幌・K)

編集部より 乱れに乱れて想いはみんな同じ。でも敵のネライは明らかです。円やドル、そして金融危機まで勃発して、これから面白くなりませ。がんばろうよ。

雲仙、奥尻、神戸 阪神大震災の記事がさっそく取り上げられ、さすがと感心いたしました。他の新聞や雑誌は配る気も起こりませんが。自分たちが災害をこうむって来て、あらためて災害をどう見るのか、そこで何が起こっているのか整理し分析すること、何が必要なのかを提起していくことの大切さがわかりました。雲仙普賢岳の時も奥尻の時もこんな視点がなかったんだなあと思います。災害そのものは神戸は半分以上人災ではないかと今では思われますが。ライフラインの確保という名でガス、電気、水道関係の労働者、鉄道や建設関係の労働者の働かされ方は無茶苦茶です。神戸だけでなく近畿圏から二泊三日、三泊四日で狩り集められています。神戸の教職員の実態もバラつきはひどいのですが、防災指令三号、非常事態と組合もあげての危機管理体制といった勤務です。他方では首切り合理化の続発です。(神戸・K子)

編集部より 神戸に早く行かなければと思いつづけておりましたが、二八日からうかがいます。

選挙そして合理化 選挙闘争も動き出していますが、「消費税を容認した中で何を訴えればいいのか」との青年の声が出されています。私も青年共闘の役員として、当面「今の職場実態が許せるのか」「社会党に求める政策は何か」といったことを地域の中で考えあう場をつくっていきたいと思っています。私の郵便局も二月で二名削減、内外相互応援の導入、総合服務に切替になり、ますます生産性が上げられることになりました。仲間は「苦しくなるけど、合理化の本質にこだわる」と言っています。私も同感です。(全通・S)

編集部より 己れの信ずる道を訴えましょうよ。

「ゴキちゃん」とお寝んね あの日は事務処理に手間取り、帰寮は十一時半。風呂にも入れず布団に。夜中ふと目を覚ますと背中から変な感触が伝わってくるんです。今まで味わったこともないものでした。電気をつけ布団をみても何もありません。「変だ、おかしい」と背中を

みてみると、シャツに大きな「ゴキブリ」が。しかも潰れて！何度も上京していますから、「ゴキちゃん」を見たことはありませんが、いっしょに寝て、殺してしまうなんてはじめて、北海道では誰にもしゃべらないゾ。(国労闘争団「上京団ニュース二月号」)

編集部より 楽しいニュースありがとうございます。もっと楽しんで。

組織強化・拡大へ 国鉄闘争も二〇二億問題が和解、全面解決にむけ動き出した。解決にはJR内での組織強化・拡大が必要条件。目がまわるほどにテンポの早い合理化、資本主義の本質が手にわかる。負けてはいられない。(国労上野・松川)

誌代おくれゴメン 請求書収容。いつも遅れすみません。

編集部より ご多忙のところ本当にありがとうございます、がんばります、よろしく！

地震と階級性 阪神大震災においては階級性が明らかに証明されています。だまされてはいかん。(大阪・S)

# 上野建一著 社会通信社／上野出版実行委員会刊 政界再編後を読む——護憲の旗を掲げて

(A6判上製本、二〇〇頁、定価千五百円)

現在の日本の政治は、新しい選挙制度を契機に政党の再編が行なわれ、保守二大政党制が進んでいる。そして次かその次の総選挙後には、一大政権党とその二分の一前後の党とさらに幾つかの小党の国会構成になる可能性もある。そのときの日本の政治は国民の「人権」と「くらし」と「いのち」とによって民主的で公平なものになるのだろうか、大きく疑問である。それどころか戦後五十年の民主主義を「総決算」するため改憲勢力が動き出す、と私は読む。政治のめざす究極の目標は「正義と人道の支配する最も民主主義的な社会の実現」にあると先達は教えている。この立場から現在進行している政界再編を細川連立政府の成立からの若干の総括を含めて検証し、将来を展望しようとしたのが本書である。

(はじめに)より

**第一章 小選挙区制と政界再編の行方**——二大保守政党制から一大政権党へ 政界混迷の根源は「小選挙区制」／逆流の中でつくられる政界再編／政界再編の現段階／労働組合と政党との関係／対談・「化学とは事物の観察」

**第二章 混迷する連立政権の軌跡**——保守二大政党制への政治過程 改憲勢力を占めた保守、惨敗の社会党／自民垂流の細川連立内閣／「政治改革」を小選挙区制にすり替える／村山執行部一ヶ月早くも「剣が峰」／自民党より非民主的な細川政治／細川連立内閣から離脱せよ／動きだした新新党への策動／ついに出た「リベラル新党」構想／細川内閣崩壊後の政局／村山連立内閣は成立したが／村山首相の「自衛隊合憲論」に驚く／「自衛隊合憲」のもたらずもの／党内に民主主義のない社会党／ミサイル防衛体制の推進／小沢・市川「新新党」事実上発進／「山花新民主連新党」動き出す／「丸ごと新党へ」が勢い増す／早くも保守二大政党の誕生

**第三章 「政治改革」と「政界再編」の虚構** 政商は今なお生きている／一千万支持者を捨てる解党主義／護憲派の消滅ねらう小選挙区制／細川連立内閣の「政治改革」／基本政策転換と村山内閣／「基本政策」と「消費税」で社会党らしさ失う／一九九五年の政局を展望する

キリトリ線

申し込み書	
ご住所(電話)	
お名前(団体名)	
冊数	
支払い方法	現金、郵便振替、労金
<p>※取扱規呈</p> <p>1冊の場合 定価プラス送料310円          2冊～5冊 送料・当社負担          6冊～9冊 150円引(送料当社負担)          10冊以上～ 200円引(送料当社負担)          1冊の場合、郵送費がたいへん。まわりの仲間にも声をおかけ下さい。</p>	

申し込み書

ご住所(電話)

お名前(団体名)

冊数

支払い方法 現金、郵便振替、労金

お申し込みは社会通信社へ 〒一五一 東京都渋谷区本町六一二八―一九〇四

TEL 〇三―三三七七―四六四九

FAX 〇三―三三九九―五三六七

郵便振替 東京〇―58431

※前号のFAX番号は間違っており  
 ました。この番号によりしく。